

いじめ調査の意味は

子供は大きい子が小さい子を、強い子が弱い子を支配する。支配とは服従させ言うことを聞かせることである。これをすべていじめに入れたから三〇万件を超えた。文科省や学校は膨大な時間とエネルギーを投じていじめ調査を続けている。教育者が子供の本能的「世界」を否定して何になる。

国民の幸福のためのトゲ削り

とんがったところを削っていけば丸くなる。丸い球になる。痛くない。肌によさしい。握り心地もいい。「まあいいことはいいことだ」とみんな声を合わせる。「過労死ライン」月間残業八〇時間を目安に厚労省や労働基準監督署は会社を指導し、問題がある会社は是正勧告を行っているが、まだ成果は上がっていないが、政府は「同一労働同一賃金」「女子力活用」などの働き方改革を推進している。とんがりやをなくしてみんな平等にする営みである。

さらに政府は、人づくりと銘打って高校大学の授業料を無料にするつもりである。学校の授業料と人材育成はほとんど無関係なのだが、人材育成のために何をすればいいか解らないので、取りあえず教育費を軽くすることにした（とんか思えない）。

民間団体が東京都渋谷区と組んで貧困家庭の中学生三年生の学習塾月謝分として二十万円を補助する「寄付を募っている。家が貧しいがために塾に通えない子を救済するアイデアである。この試みはたちまち全国に広がる。差別反対をトブスローガンとする市役所区役所町役場の面々が両手をあげて賛成するからである。「差別をなくす」とんがり削りである。

経宮管理講座 347 染谷和巳

いじめとして書き、教師がそれをそのままいじめ件数に入れているからである。

最近中学校で教師が生徒を大声で叱るなど厳しく指導したため自殺した子がいた。子が「先生にいじめられたから死ぬ」と言っていたというところで世間は教師を悪人と見做しているが、教師本人の言い分や他の生徒、他の教師の見方を加えて判断すると、教師がいじめ殺した」といはい切れない。

教師が生徒をいじめたケースは稀である。殴れば暴力教師として追放され、生徒が鼻血でも出せば犯罪者にされる。生徒を厳しく叱ることも許されなくなりつつある。教師は上に立つ指導者ではなく、生徒と平等の人間。そこで小学校教師などは何かするのに賛成にする政策である。

また友人の荒田の話。荒田君は小学校の時近所のガキ大将だったが、勉強中心の中学生になり、三年になってからいじめられるようになった。クラスの男子の中で二番目に小さく、運動が苦手でマラソンは中位で持久力はあるほうだったが、徒競走はいつもビリのほう。一番小さい子は全くいじめられず二番目の荒田がいじめられた。それは勉強ができたからである。クラスで二番、学年三百名中五、六番、クラスの級長や学年委員に選ばれた。

自分を鍛えて死んだ気で戦う

いじめるのはゴンとセイスケ。ゴンが学年で一番の短距離選手。体格はがっちりしてたくましかった。ほとんどの子が羨し、芋めきの弁当あるいは貧しくて昼抜きの子もいる中でゴンはいつも銀しやりの大きな弁当箱を開けていた。セイスケはまじめな女の子の不良でけんが強かった。二人とも勉強はできないほうだった。ゴンは校庭の塀の影に荒田を呼び出して威張り散らし威嚇した。セイスケは女の子の家に荒田を連れて行き、女の子と大人びた口をきいて、もじもじしている荒田をせせら笑った。他のクラスの男子と取っ組み合いのけんかをしてケガをさせて勇名をさせた。荒田もよく腕をねじられ、プロレスの技をかけた。

ゴンは商業高校に行きいじめは終わった。セイスケは工業高校に行つてからも荒田の自宅を訪れて遊びに連れ出した。荒田はいやだったが遊びにつき合った。荒田が大学に入つてからもセイスケは荒田を誘った。勤めているので金を持っており、いつも飲み食いの代金はセイスケが払った。これで荒田は完全に支配された。

荒田は柔道を習い、初段の先輩を背負い投げで投げとばした。体も人並みに大きくなり自信がついた。ある夜、誘い出されて、「お前

の不自然の道を行けば全滅する

平和と安全、貧しい人を助けましょう、困っている人に愛の手を、差別反対、弱者優遇、みんな仲良く、こんな世界を作りましょう。もしこんな世界が実現したら人はだめになる。心身が弱くなり働けなくなり動けなくなり、かつてパストやコレラで全滅しかけたように、強い細菌に喰い殺されて地球上から姿を消す。

まあいい世界は不自然なのだ。自然は人にやさしいものではない。洪水、大雪、干ばつ、地震、台風と天災はつきつぎに襲ってくる。高山あり、崖あり、谷底あり、急流、荒波、砂漠あり。

日当たりのいい花のお庭やのどかな平野は限られている。とげを削り取るとは天候も地面も人に都合がいい住みやすいところにするのである。

地球は何万年もかけて生命を育み、その調和をはかっていた。家を建て道を開き木を切り倒し火を

のようながキは」とセイスケが高飛車に服従を強いた。荒田は胸ぐらをつかんで腰車で投げ飛ばした。

セイスケはしばらく路上でのびていたが、立ち上がった。「お前、強くなったな」と言った。これでセイスケのいじめは終わった。家に呼びにくることもなくなった。二人のいじめつと、ゴンは五十で早世した。セイスケは六十で糖尿病が悪化して松葉杖で歩いていた。七十を過ぎた今でも荒田は二人をいい奴だったとは思えない。いじめられていやな思いをしたが、荒田は死にたいと思ったことはない。親や教師に訴えたこともない。小さくて非力な自分が強くなるしかないと思っていた。

長い人生のためには弱い自分を鍛えていじめの相手に勝つしかありません。解つていたからである。